禁裏樣へ參
一初鮀　一折例年進上之佐々木四郎三郎○中略　一初雁禁裏樣へ參　一例年進上之朝倉彈正左衛門尉

十月三日

一初鱈　三　武田大膳大夫

〔大館常興日記〕天文十年正月十一日、一初鮒十六角霜臺より、爲年始御祝儀進上之、書狀在之、毎年如此

今日の日付也、仍則以宮内卿御局、致披露之心へて可申由被仰之也、

〔吉原雜話〕初松魚の咄し

一紀の國屋文左衛門が紀文本宅、三十間堀なり、大巴屋とやらへ來り遊びし頃、まはし方十兵衛といふもの、異名母衣重兵衛とて、淺草祭に山の宿の大母衣誰れとても荷ふ人なきを、此者一人にて負ふて數邊まはりたる大力なり、故に其名あり、佐野次郎左衛門を、捕手の一ばん、ひやうごや八ッ橋さわぎ、或時紀文紀文俳名千山重兵衛にいふは、ことしは初松魚是非に此里にて喰ひたきものなり、其方がはたらきにて、誠に江戸に一本も見へぬうち料理してくふべしと申付ける、かくて重兵衛肴問屋殘らず賴み置き、前金をうち、初日入來りたる船をば悉く買もとめて、頓て迎ひの人を遣し、紀文入來りけるに、鰹たゞ一本を料理して出しける、大勢の牽頭末社あとをはやく〳〵と聲を懸れども、唯一本出たしたるのみなり、かくてはもどかしきとて、紀文直にはしごより下り、もはや魚はなきかと云時、重兵衛庭の大半切二ッ三ッ蓋をとり、是程御座候得共、初鰹はめづらしきが賞玩なり、あとは家内のもの近所の人々にふるまい申すべしとて、一向に出さず、其時當座の褒美として、金五十兩くれ、後々も重兵衛が氣象を嬉しがりて、町屋敷など買て遣しけるとなり、

〔諺草小言〕二太平日久シク驕奢風ヲ成シ、食味新奇ヲ競フ、獨活新芽ナド、土室ニ養ヒ其出ルコト尤モ早シ、其他モコノ類多シ、コレハ鬱養彊孰ト云ベシ、後漢安帝紀曰、凡供薦新味多非其節、或鬱養彊孰、或穿掘萌芽、味无所不至、註ニ爲土室蓄火、使土氣蒸鬱而養之、彊使成孰也、トイヅ方モ同ジコトナリ、